

## ● ● ● ● 第2回多職種のための投稿論文書き方セミナー

## 投稿論文の文章構成

小枝 達也 (国立成育医療研究センターこころの診療部)

## I. はじめに

多職種のための投稿論文書き方セミナーは、当協会の編集委員会が主催しているセミナーである。第2回のセミナーを開催するにあたり、編集委員会においてテーマについて検討が行われた。その結果、論文の構成が不明瞭な投稿論文や、文章表現があいまいで何が言いたいのか伝わってこない論文が多いので、論文を執筆するにあたり知っておくべき基本的な構成や文章表現について、わかりやすく伝えようということになった。そこで本稿では、論文の構成と文章表現上の留意点について記す。

## II. 論文構成について

論文の構成は、序論、本論、結論の3つで構成するのが基本である<sup>1)</sup>。似て非なるものに報告書がある。報告書とは、実際の出来事を時系列的に陳述したもの、あるいは調査結果をわかりやすく解析してまとめて報告したものである。論議をしているか、していないかが論文と報告書の分水嶺である。なので、論文では結果について論議し、考察することが求められる。

また、文章の書き進め方の一つに起承転結があるが、論文である限り、序論、本論、結論という構成が正しい<sup>1)</sup>。起承転結を明確にした文章は、物語や小説には適していて、読んでいて面白い。次はどう展開するかワクワクもする。しかし論文は面白くなくていいし、ワクワクしなくてよい。論理的に筋が通っており、科学的に合理的であり、新規の情報やこれまでの知見に証拠を積み重ねるものであればよい。

## 1. 序論について

序論には、問題の所在と目的を書く。問題の所在とは、そもそもこの論文を書くに至った理由である。目的は問題の所在に対して、自分はこの論文においてどこまで解決するのか、その目指すところを示したものである。つまり、何か未解決の出来事があるとか、はっきりとしていない事象があるという「問い」とそれを解決するために目指すところを明記したのが序論ということになる。序論には「問い」に関する歴史やきっかけなどを記すと、読み手は問題の所在の背景を知ることができて、興味を持って論文を読んでもらえることになる。

論文の執筆を進めるにあたっては、常に序論に立ち返って問題の所在は何だったのか、目的は何だったのかを意識しながら書き進めるとよい。これを怠ると、書き進めているうちに論点がずれてきて、大きく方向を見失うことにもなりかねない。筆者は小児保健研究の編集委員として、こうした論文の査読を多く引き受けてきた。論点がずれていく論文の多くは、序論に問題の所在と目的が明記されていないことが多いのである。

中には序論で結論を述べてもよいとする考え方もある。分野によっては一例えば過去の判例を論ずるものなどは、論旨を明確にするために、序論で結論を述べるという手法があり得ると思う。しかし、小児保健研究誌が掲載する類の論文においては、適切とは言えない。

## 2. 本論について

本論には対象と方法、結果、考察を書く。対象と方法は、結論を読み解く際のオリエンテーションともな

るべき情報であるので、簡潔明瞭に書くことを心がける。読み手（ここでは査読者としてよい）は、調査研究であれば、調査の時期や人数、年齢、地域などを頼りに、論文に書かれている研究の規模や確からしさの瀬踏みをしながら、読み進めていくので、こうした情報を簡潔に記すことが必須である。

時々、どうしてこうした対象者になってしまったのかといういきさつが詳しく書いてある論文の査読をすることがある。研究を行った当事者にとっては思い入れの強い出来事かもしれないが、科学的に思い入れは無意味であり無用である。あくまで簡潔に書く<sup>2)</sup>。

方法では、とくに新しい方法（調査手法や検査など）を使っている場合には、簡単に方法の解説に触れておくことを推奨したい。自分たちが慣れ親しんだ方法が、一般的だと思いついてある論文が時々みられる。小児保健研究誌のような多職種が購読している学術誌では、とくに方法のわかりやすさに配慮するとよい。調査や検査の方法だけでなく解析方法についても明記しておく。とくに統計を使った解析の場合には、統計手法はもちろんのこと、統計処理を行ったコンピューターソフト（バージョンも含めて）名も書き忘れないようにする。

結果では、図や表を用いて、見てわかりやすい工夫をするとよい。統計解析を行った論文で、有意差が認められた事柄を一つひとつ記述してある論文が散見されるが、読んでいてよく理解できないことが多い。一目でわかる表や図に統計解析の結果を記し、本文ではその要点を記述するとよい。

質的研究でも、インタビューで得られた対象者の言葉を記述するのではなく、情報として加工しまとめた形で記載するとよい。そのためには表や図を活用すると格段に読みやすくなる。

考察では、結果に基づいて論ずることが重要である。予想通りの結果が得られるとは限らない。結果はAとなったが、わたしはBだと思ふといった類の、結果を無視した論じ方は科学性を著しく欠くことになり、もはや論文とは言えないものとなる。

考察で結果を繰り返し記述して、論じている原稿を査読することがよくある。こうした繰り返しは、論文が迂遠な印象を与える。繰り返しは最小限にとどめるとよい。

また、序論で述べた目的との整合性を意識して考察することが重要である。目的を達成するために調査を

し、解析し、結果を得たのである。目的を達することができたのか、あるいは目指すところには到達せず道半ばであったのか、常にこの点に立脚して考察を書き進めるとよい。道半ばであったなら今回の研究での限界についても言及しておく。こうした思考の過程で今後の課題も自ずと見えてくる。

### 3. 結論について

結論では、明確になったことを簡潔に記す。箇条書きを用いるとより、読み手にわかりやすくなる。

### 4. 文献について

参考とする文献の数についてとくに決まりはないが、少なすぎても多すぎても好ましくない。とくに学術誌では字数やページ数に制限があることが多いため、原著論文で20前後が標準的であろう。投稿規程に文献数が記載されていることもあるので、注意が必要である。

### 5. 章立てについて

章立てとは、論文を構成する住所の番地を示すようなものである。一般的には、章・節・項という階層を用いる。章が県とするなら、節は市町村、項は字に当たる。卒業論文や修士論文などは、一般的に分量も多いため、この章立てを常に意識して、今は市町村レベルの階層のことを書いているのか、字レベルのことを書いているのか、全体を俯瞰しながら書き進めないと、道に迷ってしまうことになる。その結果、1, 1), (1),

表 一般的な論文の章立てと留意事項

1.	はじめに（あるいは緒言など）・・・序論に当たる
2.	対象と方法 1) や (1), ①などを用いて対象や方法の詳細を分割して示す
3.	結果 1) や (1), ①などを用いて、結果をカテゴリー別に分け、わかりやすい工夫をする
4.	考察 考察でも1), (1), ①などに分けるとよいが、結果の章立てに対応する形をとると、書きやすくなるし、読み手（査読者）も正しく理解しやすい
5.	結語 簡潔明瞭に書く 箇条書きもよい
6.	謝辞（研究費を取得している場合には、ここに明記する。また共著者になっておらず、研究に貢献した人や組織に対して謝意を示す）
7.	文献

①などを使い尽して、✓や△、♡などのマークを勝手に使い始めてしまうことになる。

小児保健研究のような学術論文では、章、節、項といった表現でなく、I, 1, 1)といった数字でもって階層を明記することが多い。よく使われる章立てと留意事項を表に示すので参照されたい。

### Ⅲ. 文章表現上の留意点

#### 1. 表現上の留意点

質的調査の論文では、インタビューで得られた対象者の言葉を「 」でくくって示してある原稿をよく見るが、大変見苦しい。一度「 」を使ってしまうと歯止めがきかず、際限なく「 」が続き、最後には「 」では足りなくなって、『 』を使っている原稿まで見かけることがある。インタビューで得た言葉を吟味し、情報としての価値を与え、可能であれば普遍的な概念に置き換えて記述すると「 」は減らすことができる。

量的調査では統計解析を行うことが多く、有意差があった群間について、いちいち記載してある原稿を査読することがある。これもまた見苦しい。表や図を活用して、一目でわかる工夫を期待したい。

「～である可能性が示唆された」、 「～である可能性

があるかもしれない」といった記述は二重に可能性について言及した表現なので、避けることが望ましい。同様に「ないこともない」という表現も二重否定であり、文章をわかりにくくする。

#### 2. 文献の示し方

序論や考察の中で「～であることが知られている」や「～であることが報告されている」という表現を使うことがあるが、この場合には必ずその知見や先行研究を文献として示すべきである。すでに知られている知見や先行研究の結果の上に立脚して、この研究を行っているという立場をとる場合、その文献を示さないと、砂上の楼閣になってしまう。少し荒い表現を使えば、ありもしない既成事実をでっちあげて研究を開始したと言われかねない。そうした誤解を防ぐ意味でも適切な文献の示し方は、重要である。論文の信頼性と価値にかかわってくるのである。

#### 文 献

- 1) 澤田昭夫. 論文のレトリック. 東京: 講談社, 1983.
- 2) 黒木登志夫. 知的文章とプレゼンテーション. 東京: 中央公論新社, 2011.